



TITLE:

総合社會學概念

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 総合社會學概念. 經濟論叢 1929, 28(2): 208-224

ISSUE DATE:

1929-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129715>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 二 第 卷 八 十 二 第

行發日一月二年四和昭

論 叢

犬 稅 論 法學博士 神戶 正雄

總合社會學概念 文學博士 米田庄太郎

財產生命保險 經濟學博士 小島昌太郎

明治初年に於ける大阪爲替會社 經濟學士 菅野和太郎

リカアドウの恐慌論 經濟學士 谷口 吉彦

時 論

我國の國富及び國民所得を論ず 經濟學博士 汐見 三郎

說 苑

經濟政策學に於ける超越的目標に就いて 經濟學士 藤田 敬三

豫算に依る企業の統制 經濟學士 大塚 一郎

雜 錄

獨逸に於ける中央地方稅の發達 經濟學士 中川與之助

美濃稻津村小里の割山制度 經濟學士 井 寛 弁

總合社會學概念

米田庄太郎

(1) 總合社會學概念を新たに規定する必要、(2) トレールナの總合社會學排斥論、(以上本號掲載)(3) 總合社會學と形而上學、
(4) 總合社會學の純科學的概念、(5) 純科學的總合社會學の可能性、
私は本雜誌昨年七月號に於て、「一般社會學の概念」と題する一論文を公にして以來、「特殊社會學概念の批判」、「ジムメル社會概念批判」、「形式社會學概念批判」、「包括社會學概念批判」等の論文を引き續いて公にしたが、本號の論文「總合社會學概念」は右の一系列の諸論文の最後の部分に當るものである。但し私は本雜誌の編輯の都合上、此等の諸論文に別々な題名を附けたが、實は此等の諸論文は「一般社會學の概念」と題す可き一論文の諸部分を構成するものである。讀者諸君は其の積りにて閱讀されたい。

(1) 總合社會學概念を新たに規定する必要

「一般社會學の概念」以下の一系列の諸論文の主旨は、「一般社會學の概念」中に述べし如く、つまり社會學は近來獨逸の一派の社會學者及び夫れに隨從する我國の幾多の社會學者が考へる如く、學問論上他の社會科學が特殊社會科學であると云はれると同じ意味にて、一の特殊社會科學ではあり得ないものにして、私の云ふ意味にて一般社會科學であらねばならぬと同時に、即ち特殊科

學よりもより廣き領域を有するものであらねばならぬと同時に、一般社會科學以上に其の領域の廣いもの、即ち一般社會科學も亦特殊社會學も總て社會科學を包括するが如き廣大なる領域を有する科學でもあり得ないこと、つまり社會學は一般社會科學よりもより狭きものでも、亦より廣きものでもあり得ないで、社會學即一般社會科學である可きことを論證するにあるのである。かくて私は先づジムメルの社會學概念を、社會學を一の特殊社會科學と見る方針の代表的なるものとして次にゾエルケムの社會學概念を、私の包括社會學概念と稱するものの代表的なるものとして批判的に論究して、ジムメルが一の特殊社會科學であるが如くに見る彼の形式社會學なるものは、社會的現實態に於ける形式の性質上、決して他の社會科學と同じ意味で一の特殊社會科學であり得ず、私の云ふ意味での一の一般社會科學即ち純正社會學であることを論證し、又ゾエルケムが一般社會學も亦特殊社會科學も總ての社會科學を包括する「社會科學の全體或は體系」と見る社會學の概念は、一の方法としての社會學と一の科學としての社會學とを混同するものにして、方法としての社會學の適用される範圍は如何に廣大であるとも、科學としての社會學の領域は學問論上一般社會科學の領域を出るものでないことを論證したのである。

併し私は社會學を單に一般社會科學と見るだけでなく、一般社會科學は私の組織社會學或は社會科學一般方法論と稱するものと、純正社會學と稱するものと、總合社會學と稱するものと、

相聯結して一の統一體をなす三部門から成立するものにして、隨ふて一般社會科學としての社會學は此等の三部門から成立せねばならぬと見るのであるから、社會學は一般社會科學であることを論證せんとするに當つては、自から此等の三部門の必要性及び可能性を一緒に論述せねばならない。かくてジムメルの形式社會學概念を批判するに當つては、私はそれは純正社會學としての一般社會學であることを論證すると共に、それだけで社會學が完成して居ると考へるのは正當でなく、其の外に總合社會學及び社會科學一般方法論の二部門を認めなければならぬ理由を明かにし、且つジムメル自身が晩年に彼の思想が最も圓熟するに至つて、右の二部門を認めて來たことを明示し、又ヅェルクムの包括社會學概念を批判するに當つても、彼の一般社會學の概念は主として私の總合社會學と稱するものに當るが、併し詳しく吟味して見ると、彼が特に社會學的方法として論述して居るものは、つまり私が一般社會學の他の二部門と認める社會科學一般方法論及び純正社會學を粗糲に併合せるものであることを指摘し、更に輓近ヅェルクム派の社會學者中には之を明かに一般社會學の一部門として、一切の社會科學の基礎と認める人々の現はれて來たことを述べた。然るに社會科學一般方法論或は組織社會學に就ては、私はさきに述べし如く、學問論の發達の現状及び社會科學の研究の現状から見て、便宜上之を一般社會學の一部門と認めるに過ぎないのであるから、此處では是れまで述べて以上に詳しく論ずる必要はないと思ふが、

併し私は總合社會學は本來一般社會學の本質的一部門をなすもの、嚴密に云へば純正社會學は一般社會學の基本的部門であるが、總合社會學は一般社會學を大成する部門、或は冠冕となる部門である。尙ほ總合社會學を科學としての一般社會學の一部門と見るに於ては、傳來の總合社會學の概念は到底保持され難いので、新たに總合社會學の概念を新しき學問論上規定しなければならぬ。其等の理由によりて此處に私は總合社會學の概念を稍と詳しく論述して、以て一先づ「一般社會學の概念」を完結したいと思ふ。

さきに述べし如く獨逸に於てはジムメルが、始めて總合社會學の意味での一般社會學の概念を徹底的に排斥したのであるが、併し同國にあつても彼の見解を承認する人々は直ぐには現はれなかつた。是れ千九百八年に公にされた彼の「社會學」に對して、其の頃加へられた同國の社會學者の批評を見ても明白である。但し私はさきに述べし如く、同書に先だちてジムメルの發表せる論文によりて、既に彼の見解の重要を批判的に承認して居たので、かくて私は今日の獨逸の社會學者の何れにも先だちて、彼の社會學論の意義を認めたことになつて居る。然るに其の後間もなくフイアカントやフオン・ウイゼ等の一人々か、ジムメルの社會學を大體上承認して形式社會學を盛んに唱へ出すに至り、若き獨逸の社會學者中之れに雷同する人々が起り、又其の影響によりて我國の新進社會學者中にも、形式社會學を社會學の全體と認め、總合社會學を排斥する人々が續々起つて來たのである。併しさに述べし如く、獨

逸に於て始めて總合社會學の意味での一般社會學を排斥して形式社會學を唱へ出せるジムメル自身は、晩年彼の思想が大に圓熟するに至つて、其の舊見解を修正し、一般社會學の名の下で總合社會學を實質上承認して來たので、かくて彼がさきに總合社會學を排斥する爲めに論述せる思想は、効力なきものとなつて居る。されば其の後に於ても尙ほジムメルの舊見解を固持し、總合社會學を排斥せんとする人々は、ジムメルとは異なる新しき論據を求めねばならない。然らば今日總合社會學を排斥する新しき論據として獨逸の社會學者は如何なる思想を呈出して居るか。私は此の問題の考察に於て大に注目す可きはトレールチ(Troeltsch)の説であると思ふ。それで私は此處に、特に彼の總合社會學排斥論を稍々詳しく考究して見たいと思ふ。

(2) トレールチの總合社會學排斥論

フィアカントは其の著「社會學」の序論の始めに、「吾々はトレールチと共に近世社會學に於て二つの主要方針、即ち歴史哲學的百科全書の方針と分析的形式的方針とを區別する」と云ひ、そうして第一の方針を古い方針として、トレールチの説に従ふて排斥し、第二の方針を新しき方針と稱して之を採用して居るが、此處に私が特に重要視するのはトレールチが第一の所謂古い方針を排斥する理由である。それで私は特に其の理由を批判的に考察せんとするのであるが、就ては

彼が第一の方針即ち總合社會學の方針を排斥する理由、及び第二の方針を採用する理由を簡單に論述せる論文「社會學の概念及び方法に就て」(Troeltsch, Zur Begriff und zur Methode der Soziologie; Weltwirtschaftliches Archiv, 1916.)の概要を述べて置きたいと思ふ。

今トレールチは右の論文に於て先づ、根本的には社會學の基本的見解は只二つあり得るだけであり、そして其の一のみが正當であつて、他は一切の謬見及び混亂の源泉であると論じて居る。

但しトレールチは右の二つの方針を區別したが、別に之れに特別な名を附して居ないので、其の一を歴史哲學的百科全書の方針、其の二を分析的形式的方針と命名せる「フイアカントであるかと思はれる。

『吾人は社會學に於て、普遍的概念的態度をとる一の個別科學或は特殊科學(社會化一般の諸形式及び諸條件を比較的公式化せんと努め、それによつて歴史科學に對し又文化哲學に對する一の重要な補助學となり、常に社會的に形成されたる歷史的事象、或は社會的諸前定及び諸結果を包有する歷史的事象の理解に對して、同様に又其の起源、形成及び作用に於て社會的に制約されたる文化價值に對して、一の前定となる處の)を認めるか、又は一般學(社會自體即ち人類及び其の現實在中に相交入する其同生活動の諸關心を考察し、そうしてまさしく夫れによりて人類の發達史をも亦理想目標をも構成し、新しき包括的々、又學問論普遍的方法に従ふ一の學問に於て、歴史科學、歴史哲學、文化哲學及び倫理學等を總括する處の)を認めるか、兩者の何れかを認めねばならぬ。』……右の二つの可能性に就て、私は只第一のものが正當であつて、第二のものは一切の謬見及び混亂の源泉であると思ふ。』

トレールチは夫れより第一の可能的基本見解の最近の適例としてバールトの社會學論 (Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie) を詳しく論評して居るので、同論文の大部分はつまりバールトの社會學論の批評から成立して居るのである。そうして其の批評は傳來の總合社會學概念の批判として、甚だ重大なる意義を有するものと思はれるから、此處に之を稍々詳しく述べることをする。

トレーリチの論ずる處によれば、バールトは社會學とはつまり歴史の科學的研究と合致し、更に結局歴史哲學と合致するものにして、かくして一般的には歴史的思惟の本質を意味するものと解するのである。要するにバールトにあつては、社會學は結局科學となる歴史的思惟と、そうしてまさに夫れが爲めに又倫理學（倫理學は歴史的世界に於ける自然科學の繼續にして、自然科學が物體界の法則を探究する如くに、歴史の法則を探究するものである以上）と同一視する可きものである。今バールトが右の如くに、社會學を歴史科學、歴史哲學、文化哲學及び倫理學と同一視する根本的理由は、つまり學問的認識の本質に關する彼の方法論的根柢見解に存するので、其の見解によれば學問的或は科學的認識は實在一般の唯一の可能的理解にして、又客觀的科學的真理の所有者として、純客觀的科學的近代に於ける實際的生活、政治的生活、社會的生活等の科學的規制の任務に當る可き、又當り得るものである。然らばバールトが學問的或は科學的認識の本質と認めるものは何であるか。

バールトによれば論理學及び眞理は只一つあり得るだけであるが故に、科學的方法も只一つあり得るだけである。そうして夫れは因果原理の方法、即ち事象の時間的繼續を、前方及び後方への聯絡の嚴格なる必然性を以て因果的に説明する方法である。科學及び客觀的認識は因果的説明にして、隨つて云ふまでもなく無制約的に決定主義的なるものである。かくて客觀的に説明する科學の最惡な敵は不決定主義（Der Indeterminismus）及び夫れと密接に結び附く處の、見損上原本的なるもの、卒直に個性的人なるもの、及び創造的なるもの或は自發的自然的な新しき始め等の個性を神秘的に信仰することである。かゝる信仰は只吾人の注意を、剌那的な心理的事象に狹めることによりてのみ生起するものにして、かゝる事象を客觀化し、其の前行的事象を引き入れて吾人の注意を擴大すれば、直ちに消滅するものである。されば總ての目的設定にあつても、一定の目的及び其の内部的剌那的動機力を專視するだけでは充分でないで、吾人は更に其の目的表象其物の生起の因果的必然性に注目せねばならぬ。つまり各目的は其の原因に結び附けて研究されねばならぬ。そうして又何れの目的の妥當性の辯明も、單なる主觀的及び自律的肯定或は剌那的感激から脱却して遂成されねばならぬ。何れの價值も普遍的及び無制約的である可くは、自然科學的に證明され、夫れは如何なる原因からして、無制約的に生命創成的又は生命破壞的であるか、明かにされねばならぬ。されば其の全進行に於ける人類史としての歴史學も亦、只因果的にのみ説明する方法の適用によりて、自然科學を模範として、純客觀的科學に高められねばならぬ。歴史にありては價值もやはり因果的に説明され、又夫れによりて因果的に辯護する可きものにして、そうして其の因果的辯護といふはつまり只、あるがままの因果進行は其の永續的結果に於て永續的價值を實現すると云ふ假定によりてのみ、基礎附けらる可きものである。かくて永續的價值と云ふは、本質的には結果の持續性に基いて、あるが如きものとして認識する可きものである。價值あるものとは、要するに持續的なるもの、大なる効果を生ずるものを意味するので、物が持續すると云ふ事實によりて、吾人は其物の價值を測定し得るのである。

右の見解の結論として、歴史的進行は自然に於ける進行の如く當然豫見し得られるものとなる。但し歴史的進行は甚だ複雑なるものであるが故に、自然的進行の如くに確實には豫見し得られないが、しかも社會學は一社會の一般的諸傾向からして其の社會の次の時代の一般的運命を大體上豫見し得る。そうしてまさに此の事實に基いて、政治學の科學的指導及び精練が可能となる。政治學は最近の諸傾向から一般的法則に従つて、結果を豫測し得るのである。然るに今かゝる指導は總て、「科學的」には本

來只夫れ自身特有の諸原因のみを致て問題とするのであるから、其等の因果必然的諸傾向に於ける慣習的な無意識的な自己委身（自から己れの身を委ねること）と區別して、只其等の諸傾向に於ける意識的な自己委身のみを重要視するに至るであらう。かくて此處にマルクス主義進化論も亦遭遇する處の熟知された難問、即ち自然必然的發達過程を更に特に意志に取り入れ、之を意識的に促進すると云ふことは、如何にして可能であるかと云ふ難問が起つて来る。マルクス主義進化論にあつては、此の難問は助産婦説（Geburthscheorie）によりて甚だ不徹底に解決されて居る。バールトは此の事情及び其の中に含まれる矛盾に注目し、「人間は原理を作るのでなく、之れに注目し、之を表示するのである」と云ふマルクスの命題に反對して居る。併し彼は彼自身も同じ困難に陥つて居るので、そうして夫れから脱せんが爲めに彼自身の執らんとする途、即ちグントの「創造的總合説」に訴へることは、助産婦説よりも別により多く徹底的なものでないことを覺つて居ない。彼はマルクス説は心理的因果に關する謬れる理論に基き、心理的法則に於て作用する心意の能働性を認めず、心意を全然受動的なものと考へ、そうして進歩的價值高上の法則を理解して居ないと非難して居る。併しバールトに従ふもやはり、價值高上及び創造的總合の成果は前行者の論理的に必然的な歸結として、心理學的因果的に理解する可きものであるから、かくて創造的なもの及び能働的なものは殆んどゼロに均しく、そうして剝削的なものに限られたる注意の幻想に過ぎないものであるか、又は價値の眞實なる自律性及び創造は決して因果的に説明し得られるものでなく、其の本質的なものをまきしく剝削的なものに於て保有する創造として、只心理學的に理解し得られ、追感し得られるだけのものであるかの、何れかであらねばならぬ事となる。

方法論的には「創造的總合」なるもの史は、因果的に探究される處の、論理的必然的に聯結する實在現實から、價値妥當を獲得せんとする企だに於て何物をも變更しない。かゝる企だに於ては價値妥當は只一の不可不（*Erzwingend*）を意味するだけである。只發達の自然法則の把握がバールトに於ては内容上異なつて居るだけである。そうしてバールトの此の内容上異なれる把握は、自然科學的決定主義の眞中に立ちながら、しかも精神の自發性及び價値設定に一定の地位を認めねばならぬと考へるものであるが、併しそれはやはり嚴格なる一元主義の意味にて認めらる可きものと解されて居る。かくてバールトは認められる一元主義と眞實なる一元主義とを區別し、前者は現實在の大なる境界線を總て取り去り、現實在全體を同一平面上に引き均らんとするものであるが、後者は其等の境界線を無視せず、區別されたる諸領域に共同的なる高等なる眞理を探究するものであると論じ、眞實なる一元主義は現實態をあるがままに正當に説明せんとするものにして、決して之を曲解し毀損し、不具なものとなさんとするのでないとして居る。併し彼の云ふ「眞實なる一元主義」の「高等なる眞理」なるものも、やはり世界發達の「自然法則」に外ならぬものにして、觀念界及び價値界に只外觀上の獨立性を認めて其の意義を眞面目に取扱はんとするだけで、つまりは自然聯結に於ける必然的時間順序から説明することによりて、之を純自然事實に化し、現在に對しては亦過去に對して、自律的な、只目的の肯定のみから作られる價値設定を承認しないものである。一元主義は如何なる形態を裝ふもやはり一元主義にして、實在を見掛上の爲爲の本質となすものである。其の點に於ては「眞實なる一元主義は何物も變更しない。夫れは右の本來の主旨に於て、又理想主義を自然科學的に取扱ひ、價値を要求せずして説明し、しかも價値として之を主張せんとする企だに於て、甚だ不徹底的である。夫れはつまり」の自然主義化された理想主義に外ならない。バールト自身の理想主義は疑ひもな

く、又彼自身指示して居る如く、啓蒙、自然法及び自然宗教の理想主義と親密なる關係を有するものである。そして彼は歴史の尺度としての此の理想主義を、實在の自然科學的因果的な、法則的に規定し得られる運動に於て基礎附けて居る。かくて彼にありては歴史學は一の自然科學にして、實在運動の法則、進歩判定の尺度、及び歴史的事象の中核を總て一纏に認識せしめ、さうして同時に其等のものを引きくるめて、一切の將來を精神及び意志の發達の心理學的法則に従ふて形成する強制的力に高めんとするものである。パールトが其等の點に就て述べて居る中で唯一の明瞭なるもの及び明確なるものは、科學的把握の本質としての、純因果必然的な説明を下さんとする意志である。そして其の意志からして歴史の一切の本質的中核諸方針、及び歴史の判定の尺度並に將來形成の尺度を獲得せんとする一切の企てでは、本來純自然主義的骨折れる附随物、及び骨折つて損なはせざるものであることが明かに認められるのである。要するに理想主義的諸目標は自然主義的諸手段を以て證明さる可きものであると云ふことが、世界及び人類の因果的全發達はつまり如何なる目的に捧げられねばならぬかを自然主義的諸手段を以て證明すると云ふことが、即ちパールトの「眞實なる」二元主義の主旨である。かくてパールトの眞實なる一元主義なるものは、つまり實際上近世哲學者の大多數が根本的には器械主義的に思惟して立て、居るのと同様な、科學、認識、論理學、特殊諸科學、價值論、及び心理學の根本的に器械主義的な見解である。そして其の見解からパールトの主要テーゼ、即ち社會學、歴史科學及歴史哲學の同一化、並にかくの如に融合された全體に與へられる意義が、樹立されて居るのである。

トレールチは大體上右に述べし如くに、パールトが歴史科學及び歴史哲學と社會學とを同一化し、且つ之れに一定の意義を認めんとする見解、并に其の基礎となつて居る自然主義的器械主義の原理を批判的に説述したる後、パールトが右の原理から歴史科學及び歴史哲學の本質并に夫れと社會學との同一化を推論するに當つて、如何に屢々其の原理即ち器械主義に違背して居るかを指摘し、かくて器械主義的に規定され、又そうである以上完全に明瞭なる因果觀念が、最早あまり其の痕跡を残さず、之れに反して只純因果的に説明せんとする意志のみが、嚴格には實行されずに、又主張されたる因果的聯結が論理的必然性を有することなしに、獨り益々強く現はれて居るだけであることを深刻に摘發して居る。そして夫れは傳來の總合社會學の批判として甚だ重

大なる意義を有するものであるから、私は此處に特に稍々詳しく述べて置きたいと思ふ。

今自然科学との類比が嚴密に遂行される可きものとすれば、個人意識は無数の最小な、質的には出来るだけ規定されて居ない諸過程 (Vorgänge) に分解され、そうして意識相互の關係及び意識と所謂環境との關係は、まさしくかゝる最小の要素的諸過程の多數に分割され、かくて其等の關係即ち意識の結合及び分離からして、質的に規定されたる歴史的世界が、一般的關係法則に従ふて建設されねばならぬであらう。併し是れは實際上は不可能である。更に一般的法則は此等の諸過程の關係を量的に精密に公式化することが出来ないであらう、(かくの如き分解の企てでは、夫れがあるよりも實際上より多く可能であるとして) 此處ではつまり單に時間に於て、更に主として不可測な時間に於て行はれる諸過程が取扱はれて居るのである。かくて物體に適用されたる諸方法は、此處では本來適用不可能である。歴史の最後の諸實體 (Substanzen) は、かゝる最小諸要素に於て固定されることは出来ない。さればパールトにありては元素諸實體 (その變動及び相互的關係は歴史に於ける因果的説明の對象である可き處の) を引き出して構成する爲めに、何等かの選擇を行ふことが必要である。そうして今「因果的」思维は左の見地の下で此の選擇を行なふであらう。即ち歴史的生活の最も持続的な、夫れ故に最も効果ある諸現象は、歴史科學の對象かくて其等の現象から生ずる歴史の因果的説明の對象を構成すると云ふ見地である。然るにかゝる最も持続的な又最も効果ある對象といへば、夫れは諸社會である。かくて歴史的思维は、夫れが純科學的に即ち因果的に解され、必然的に又全く社會學となる。そうして夫れによりて社會學と歴史科學との同一化が證明されるのである。此くの如くに考へることは、云ふまでもなく歴史的材料の大なる狹窄を意味する。併し夫れは心理的・要素的現象に遇ることが實際上不可能なるに於ては、避け得られない一結果である。併し夫れが爲めに、根本的因果的合理主義の中に既に甚だ相對的な一の實際的要素が輸入され、殊に法則概念に於て一切の精密性及び必然性は放棄されることとなる。そうして以理性の要求としての因果的必然性の要請のみが、現實には實現される可能性なしに残存する。歴史研究を社會學として形成することは、既に夫れ自身に於て眞實なる自然科學的取扱の一の省略的代用物に外ならないのである。

併し更に社會變動及び社會の相互的關係に於て、因果原理が如何にして遂行され得るか云ふ重大なる問題が起つてくる。吾人が目前に有するは、常に同様な又繰り返す關係に於て存立する最單純な諸元素でなくして、非常に錯雜し、全く特異な形態を以て現はれる當面の諸關係に於て存立する處の、複合的な諸構成物である。然らばかゝる構成物に對して、自然科學的方法是如何にして遂行する可きか、是れは實際上只該方法を大に狭めることによりてのみ可能である。かくてパールトは複合的な社會的構成物を自然科學の諸對象中同様に複合的なもの即ち有機體に比して考察し、隨ふて生物學の類比に訴へんとするのである。然るに此の際に大に注目すべきは、パールトが依頼する生物學は器械主義的生物學ではなく、生命主義的 (die Vitalistische) 生物學であつて、そうして其の基本規定を彼はカントの有機體概念から引き出して居ると云ふことである。それで法則概念も亦當然ある可きが如くに變更されて居る。そうして最早普遍妥當的な、論理的に演繹されたる法則が取扱はれて居るのでなく、經驗的一般化或は概括 (夫れに於て有機體の生命過程、並に有機體と環境との關係、及び有機體相互の關係が、一般的公式に於て總括されて居る) が取扱はれて居る。それでパールトは個物に於ける一般化から種々なる個物に於ける過程の比較、更に關係過

程の比較に進んで行き、結局相對的に普遍的にして、常に經驗的な概念(人々が尚ほ法則として表示し得るもの)に到達して居る。是れパールの自身が嘗て表現せるが如き、「圖式化された事實」(schematisierte Tatsache)、「傾向律」(tendenzielle Gesetze)である。さればかゝる法則が立てられる證據は、云ふまでもなく其の應用可能な豐富なることに存するので、其の論理的必然性に存するのでない。

併し自然科学的方法特有の理想を狭めること(狹弊)は、右に述べし點で了つて居ない。有機體としての社會は動物有機體と大に異なる性質を有するが爲めに、該理想は更に狭められねばならぬ。社會の生活の統一原理は決して身體的諸機能の相關的聯結を意味するものでなく、精神的傾向の統一性を意味するのであつて、是れパールが各社會は一の統一的「世界觀」を有せねばならぬ、或は有せんと努めねばならぬと云ふ主張によりて證明せるものである。かくて社會は決して身體的有機體ではなくして、「精神的有機體」である可きである。是れパールが大に強調して居る點である。併しそうであるとすると、因果的説明の概念及び之を指導する法則の概念は更に變更されてくる。そうしてパールの論するが如くに、社會的法則とはつまり一の心理的機能聯結としての社會的有機體の起源、發達及び變動から、經驗的一般化によりて抽象されねばならぬ處の、社會的意志の心理學的「法則」を意味するものとなるのである。かくて此處では必然性を證示すると云ふことは最早全く忘れられて居る。そうして必然性法則が相互に結合されて人類の發達の最後の一法則に統一される度合は、云ふまでもなく不確實である。此處では全體の無限な錯雜、及び夫れによりて生ぜざる個別的或は個性的なるもの明白なる特異性を突破して、前進することは困難である。さうしてパールは根本的には、社會的意志の發達の最普遍的な法則を越へて、組織的共同社會を確立すると同時に、知力的獨立、及び外部的諸權威からの倫理的解放に、かくて全體性に見て自由主義に到達して居ない。彼は此の發達傾向を事實的に支配する法則として證明したと信じ、そうして此の傾向に無制限な持續を認める處で、此の傾向に於て因果的に辯明された一の價值を承認することが出来た。殊に彼は此の傾向を「組織への進歩」の「世界法則」中に組み込むことによりて、愈々之を因果的に辯明される一の價值として承認することが出来たのである。但し此の世界法則なるものも「ヤハリ」の自然法則としては殆んど認め得られないもので、夫れは寧ろ一の目的論的進歩公式である。(併しパールの根本原則に従へば、夫れは實在から引き出されたものとして、科學的に價值として承認され得るものとなつて居る。)

以上述べし如くパールの社會學は、彼の主眼とする自然科學的概念の嚴格性から、大に遠ざかつて居るのであるが、併しそれだけに止まらずに居ない。パールは殆んど密に、諸社會の精神的諸意志有機體を「社會」一般、「社會」自體に、即ち複数の諸社會を單數の「社會」に轉化して居るので、かくて自然科學的概念の嚴格性から、更に一層多く遠ざかつて居る。パールが論ずる處によりて考ふれば、同一の種に屬する多數の社會有機體が並存するのでなく、多數ある社會有機體は實は唯一の社會有機體即ち人類社會一般である。かくて彼は實際に於ては個々の諸社會有機體の本質、起源及び變動の説明や、其等の諸社會有機體の平行的發達法則及び平行的進行等を研究してゐるのでなく、唯一の人類有機體を對象となし、夫れは如何にして人間の心理的根柢を衝動から生起し、原始人から完全なる理性人に達するまでに、如何なる因果必然的階段を通過するかを研究して居るのである。されば「社會」自體は動物有機體及び有機的動物國家との一切の類比を脱して、人類的世界都市となつて居る。随ふて社會

學は其の人類的世界都市が、之に到達せんと努力する個々の社會有機體から、如何にして發達するかを示し、又同時に其の人類的世界都市の發達階段を證示して、其等の發達階段の連續から、精神の諸法則によりて達する可き其の人類的世界都市の目標を洞察し得るものとなつて居る。要するに歴史とは人類全體の歴史を意味するものとなり、かくて前に歴史學が社會學となつて居るのみならず、更に社會學は目的論的歴史哲學或は倫學となつて居るのである。さればパールの社會學に於ては、純自然科學的因果的概念構成中に多くの目的論的概念が混入し、其の結果複數の社會は單數の「社會」に、又因果必然的連續は發達階段に轉化して居る。此處にパールが適用する社會統一性や發達階段等の總ての概念は、自然科學的概念構成の範圍から脱出し、其の中には目的論的傾向が大に純因果原理を壓倒して居ることが觀破される。パールは社會を人類 (die Menschheit) と同一視し、隨ふて又人類史の主體と同一視して居るので、かくて社會學は當然人類史となつて居る。併しかゝる社會學は最早純粹に、自然科學的方法に従ふて建設する可きものでないことは云ふまでもない。

以上述べし處によりて、純自然科學的方法によりて建設する可き學問としてのパールの社會學は、實際上同方法を決定し、狭め或は縮めて運用し、實質的には同方法の主旨から大に遠ざかるものであることが、明かに理解されと思ふ。そうしてかゝる學問論的性質の曖昧なる社會學の効果が、其だ貧弱であることは云ふまでもない。今パールが上に述べし如くに自然科學的方法を大に狭め或は、縮めて運用して居ること、及び其の効果が貧弱なることは、既に歴史的思想に關する彼の觀念の不充分なることを指示するのである。但し此處に不充分と評して敢て謬つて居ると云はないのは、是れパールの方法は一定の眼界内に於ては正當であり、そうして其の一般化法によりて個別的なるものの歴史的理解を促進し得るからである。併し普遍的法則或は傾向を探索するものと云ふことは、タトヒ吾人が只歴史的影響を現實の探究として歴史學を考へるに止まる時でも、歴史の全生動性を正當に取扱ふものとは云はれない。歴史の全生動性は、吾人が同様の傾向及び方向線の網の真中に生長する個性的及び一度的なものを、器械主義的に説明しては、感情移入的に了解する時に、始めて其の完全なる意義に於て現はれるのである。デイルタイ、器械主義的に説明しては、感情移入的に了解する時に、始めて其の完全なる意義に於て現はれるのである。パールが兩者の見解を排斥するのは正當でない。彼が個性的なるもの概念を歴史に於て無視せんとするのは、つまり個性的なるものは因果性を脱却する處の、科學にあつては考察す可きものでない一の奇蹟である、考へるが爲めであると思はれるが、併し此の奇蹟は事實上存立して居る。そうして夫れに全く地位を認めない様な「科學」の概念は、根本に於て謬つて居るか、又は偏局なものであらねばならぬ。パールはリツケルトの説は個人の神秘的個性を承認するものと解し、彼の諸命題の中核をなすもの、即ち一切の歴史的構成物の個性なるものは、夫れは集團的なものと解されるにせよ、又個人的なるものと解されるにせよ、何れにしても原則的なものでないかと考へて居る。併し此處に肝要なる點が存するので、歴史的認識及び特に歴史的なるもの々の普通概念の構成は、自然科學の普通化とは全く異なるものである。パールの方法は一般に、歴史的物事に關する彼の

此處に右の問題に就て詳しく論述することは出来ないが、只パールの意味での「社會」を歴史の中心及び骨髄となすことの不可能性に就て一言するに止める。種々の社會化、及び夫れの制度、慣習及び共同精神等に於ける沈澱を、歴史學の對象となす

こと、少なくとも歴史家の關心の向ふ處の大時代及聯結を引き出す手段となすことは全然正當であり得る。但し其等の社會化は常に相異れる、具體的には個性的な社會化（一の關心の當面の種々なる附着點から發出し、相交又し又は絡み合ひ、相互に他より生ずる社會化の形態によりて規定され得るもの、例へば所謂中世紀が教會によりて規定されるが如くである。併し其の上に常に又特有の歴史的生活、即ち其等の社會化の中に含まれて居る個別的なるもの（吾人がまさしくあるがまゝには叙述し得ない處の）の生活が存立する。更に多數の一時的な流轉する個別的社會關係（吾人は之を社會化として表示し固定することは出来ないが、）しかも歴史的には重大な影響を及ぼすもの）が存立する。そうして常に意義重大なる個人、隨ふて傳記は、一切の網狀的複合の中から突出する歴史學の特殊な對象として存立するのである。此の事に就てはシュパン及びジューメルは、必要な總ての點を既に論述して居る。併しバールトは之れに反對して、常に「社會」自體を一の人類全體に包括されたる一切の社會學的織り合せの全體として論じて居るが、夫れは實に無數の人間の相互作用及び社會化が一の全體（眞實なる歴史學の全く知らない、又自然科學的因果的方法からは決して産出されない處の）の全體に實體化されたるものに外ならない。要するにかゝる統一的人类なるもの或は「社會」自體なるものは、形而上學の一構成物に外ならないので、そうして其の發達階段なるものはヘッケルの生物發達階段物語りと同様な、一の空想である。眞實なる歴史學はかゝる統一的人类とは全く無關係である。かゝる統一的人类の歴史は、只進化主義の形而上學者によりて説話され得るだけのものである。かくてバールトの如く歴史研究のテーマは「社會」自體にして、其の任務は「社會」の進歩階段の證示であるといふのは正當でない。歴史學の對象を此の如くに構成することは歴史（現實）と全く無關係である。歴史學は現實なる諸社會を取扱ふが、單數の「社會」なるものを全く知らない。尙ほ歴史學は社會を取扱ふだけに止まるものでない。バールトの要求する歴史研究の方法は精神の自然化であるが如く、歴史の對象を人類或は社會自體に於て認めんとする彼の企ては、現實なる事象からは構成されることが不可能なる一の形而上學である。社會自體の一元主義は器械主義的世界觀念の一元主義及び科學的一般方法の一元主義と密接に結び附いて居るので、總て此等の三者は同一の自然主義的形而上學から生來するものである。

併し歴史學の對象の法則的變動の探究が同時に發達の目標を與ふ可きものであり、又因果的發達法則の公式は同時に發達階段の標度及び評價に對する尺度を與へ、發達目標への跳躍を開き可きものであるとすれば、云ふまでもなく自然主義的形而上學は必要であるであらう。そうしてバールトにありては歴史學の對象は理性によりて規制されたる人間の全體一體であるから、かくて變動の主體は常に社會自體或は人類にして、其の變動法則は完成されたる人類を目ざすと云ふことは全く當然である。低い諸階段にありては、バールトも多數の社會を承認せねばならぬが、併し彼にありてはかゝる多數の社會の各々は社會自體への一傾向、何れもが孤ふ處の「人類」の一前形體である。要するに實在現實態を直ちに價值現實態に化成一事實的變化連續を同時に目標の進歩的準備と見ることは、一切の進化主義哲學の傾向である。進化主義哲學は總て因果性を目的性に、有るものを有る可きものに、純粹に夫れ自身から化成一させ、そうして因果的には説明されないで、闘争及び反對に於て實在を當爲に屈服させる一の自律的價值設定を、其の間に挿入しない。進化主義哲學にありては、右の如き自律的價值設定は一の命題であり、科學即ち因果必然的説明の廢棄を意味するものと解されて居る。されば自律的價值設定の作用が目的論的評價及び形成として保持され、しか

も其の奇蹟性が排除される可くは、自律的價值設定を單に實在現實態の因果的發達法則と同一化するより外に途はない。かくて評價の尺度は常に因果必然的連續の認識に於て存立することとなる。そして此處でも亦、確信され、將來を信する尺度構成の理想主義は自然化されて居る。併し此の自然化は歴史的實在現實態の研究及び自律的將來理想の設定の兩者の何れにも同様に有害である。前者は自然化によりて、見掛上統一的な併し實際には無限に分裂せる主體の必然的發達の小説となり、後者は自然化によりて無限に續く自由主義的合理主義的文化的政策的綱領となる。器械主義的自然主義的基礎の上に建設されたる、來らんとする理性支配の自由主義的メシア主義、此の相互に他に還元し得られない二の原理の最後の混合形態は、實にバールトの社會學の骨髓である。

トレールチは以上述べしが如くに、バールトの社會學の根本思想を批評したる後、其の批評の要點を更に總括的に左の如くに約説して居る。

『私はバールトの社會學の基礎となつて居る主知主義及び方法一元主義を駁撃する。私はデイルタイ、グインデルペンツ及びリツケルトの如く、自然科學的方法と歴史科學的方法とを區別する。私は更に實在現實態の研究の右の方法から、刹那的自發的に產出される評價尺度（當面の狀態から追感的及び了解的に與へられるが、併し當面の狀態の因果的に必然的な生産物として表示されない、科學的には説明され得ない、又されてはならない處の）を構成する倫理的範疇を區別する。少なくとも原則に於て器械主義的な歩へ方は、當然「刹那的なもの」を其の意義に於て把握することが出來ない、そうして之を前行者から導き出すことに於て、即ち自明的に根柢に据へ附けられて居る時間的連續中に組み込むことに於て、全く之を消滅させる。併しまさしく此等の時間及び刹那的なものの概念に於て、自然主義的合理主義が一般に解決することの出來ない重大なる問題が含まれて居るのである。』

トレールチは夫より彼がバールトの社會學論に加へたる批評が、歴史的現實態に就て建設される一切の科學に對して如何に重大なる意義を有するかを、社會經濟學を例として説述して居る。

トレールチの論ずる處によれば、要するに社會經濟學はバールトの方法に従ひ、古今東西の一切の社會經濟に共通する普遍的なる法則、殊に發達法則を、人類社會全體の發達法則に基いて究明し、そうして將來の發達を豫見せんとするが如き學問として、自然科學的に建設し得られるものでなく、歴史科學的方法に従ふて一の歴史科學として、更に科學的に準備され得るが併し其の最根柢に於ては決して科學的に基礎附け得られない處の目的設定に基いて、評價の見地から建設する可きものである。

終りにトレールチは右の如くにして建設する可きものと見る社會經濟學との關係に於て、社會

學の概念を一般的に規定せんとし、左の如く述べて居る。

『社會經濟學は一切の事象を一の社會學的統一過程及び發達過程に化成せんとする理論家の考へる如く、社會學の一部分或は一範圍でなければ、又一切の經濟的技術的なるものを社會の基本現象として立て、そうして他の一切のものを觀念論的上構として考察せんとする理論家の主張するが如く、社會學と全く同一のもでもない。社會學は寧ろ、完全に獨立して特有の諸問題を有する社會經濟學に對して、只一の補助學及び補助學と定めてあるに過ぎないものであらう。社會學は社會經濟的生活體系の歴史的研究をして、夫れ自身の中に種々なる因果諸關係を統合する社會學的全體狀態から説明し理解することを可能ならしめるであらう。又社會學は現代の爲めに建設する可き又は變更する可き經濟體系の各規範的理論に、現代を支配する社會學的構造の基本的諸條件の知識に於て其の基礎を與へ、或は來らんとする「よりよき」經濟體系の爲めには新しき社會學的構造が作られねばならぬと云ふ洞見を與へてあらう。以上述べし事は原則としては社會學と社會經濟學との甚だ單純なる關係規定である。併し此の關係規定を實際に見定めんとするに當つては、當面の社會學的全體構造が既に經濟的技術的因果諸關係によりて甚だ強く制約されて居り、又其の持續性及び統一性は其等の因果諸關係に負ふ處大なるものであると云ふ事情によりて、吾人是大なる困難に遭遇する。まさしく此處に、歴史の研究に於て煩雜に現はれる相互の被制約關係の一角が見出されるのである。そうして歴史的生活の統一性は、夫れが現存する以上は、只かゝる相互的制約關係からのみ説明されるものにして、決して「社會自體」の神祕的概念から説明されるものでない。』

さて以上述べ來りし處によりてトレールチは、パールの社會學論を實例として、傳來のコント及びスベンサー的社會學方針を如何なる意味にて排斥せんとするか、又如何なる意味にて社會學を一の科學として建設せんとするのであるかは、大體上理解されるのであるが、トレールチ自身の社會學概念は、是れまでに述べ來りし私の社會學概念から見れば、不完全な又粗雑なものであると思はれるから、後に簡單に論評することとして、是れより主として彼が傳來の總合社會學概念に加へた批評を考察することとする。今トレールチがパールの社會學を例として、傳來の總合社會學概念に加へたる批評は、根本的には正當である。傳來の社會學（即ち主として總合社會學）はトレールチの指摘する如く、科學は其の認識目標及び方法に於て一元的なるものである

と見るのみならず、更に哲學も其の認識目標及び方法に於て科學と同一のものであると見る見解、即ち學問は哲學たるを科學たるを問はず、總て普遍的因果的方法によりて普遍的概念及び普遍的法則で發見することを目標となすものと見る見解に基いて、建設されて居るものである。そうして此の學問論的見解は、デイルタイや西南獨逸派の學問論の現はれるまでは、又今日に於ても尙ほ多くの學者によりて遵奉されて居るものである。併し此の學問論的見解は新しき學問論の發達によりて、今や甚だ粗雑な見解であることが覺られて來た。此の見解は根本的には先づ哲學と科學とを方法論的に同一視することに於て、次に又總ての科學を方法論的に同一視することに於て粗雑である。哲學の本質は何であるかは、今日も尙ほ種々に解されて居る問題であるが、併しとにかく方法論的に科學から根本的に區別されるものと見るは、今や一般に行はれて居る見解である。殊にトレールチが遵奉する西南獨逸派の學問論に於ては、科學は經驗的事實を因果的に説明せんとするものであるに對して、哲學は本來價值論であるとして、甚だ嚴密に區別されて居る。私はトレールチの如く、西南獨逸派の學問論の右の根本原理を、其の儘に承認するものではないが、併し科學は全然價值的見地とは無關係なるものにして、價值的見地は全然哲學に屬するものと見る點に於ては、西南獨逸派の見解を承認して居る。さればバルトの社會學によりて最近に最もよく代表されて居る傳來の總合社會學が、一の科學であると標榜しながら、價值的見地或は目的論的見地と因果的見地とを混交し、更に根本的には前者によりて大に後者を壓倒して居

る點に就ては、さきに述べし如くにトレールチの下し居る深刻な批評に對して私は全然賛意を表するのである。更に傳來の總合社會學が自然科學的因果的方法によりて社會現象を説明し、社會現象の普遍的法則を發見することを大目標となしながら、しかも實際に於ては社會學の對象とする爲めに一定の選擇を加へて、故意に社會現象の概念を狹め或は縮めて考察し、又自然科學的因果的方法を種々に狹め或は曲がめて適用し、かくて其の到達せる結果が、自然科學の目標となすものとは大に違ふかつて居る點に就て、トレールチの加へた深刻な批評に對しても、ヤハリ私は全然賛意を表する。要するに傳來の總合社會學を排斥するトレールチの根本思想は、大體上私の承認するものである。されば科學としての一般社會學の本質の一部門或は其の冠冕としての總合社會學は、先づ傳來の社會學の如き根本的には哲學的或は形而上學的なものであつてはならないことは明白である。更に次にはヤハリ傳來の總合社會學の如き、自然科學的なものであらんとするもので、あつてはならないことも明白である。根本的に形而上學的である以上は、總合社會學は科學としての社會學の一部門をなすことが出來ず、又自然科學的であらんとする以上は、到底其の認識目標に到達することが出來ない。併しそうすると此處に重大なる問題は起つてくる。夫れは先づ哲學或は形而上學から全く獨立し、更に自然科學的ではなくして、しかも科學的な總合社會學なるものは、果して建設し得られるか、かゝる總合社會學は學問論上如何にして可能であるかと云ふ問題である。私は此處に先づ總合社會學と形而上學との關係から考察することゝする。